

「正確に読み取る力」を育むリーディング指導の在り方

— 自己調整学習のサイクルに着目した指導の工夫 —

大分市立南大分中学校 宮川 祐美子

要旨

本研究では、自己調整学習のサイクルに着目した指導の工夫を行い、「正確に読み取る力」を育むリーディング指導の在り方について研究する。自己調整学習のサイクル(予見, 遂行, 自己内省)を意識した授業展開において、読解方略を取り入れた指導を実施した。研究を進めるにあたって、自己調整学習のサイクルと関連付けられたフィードバックシートを使用し、毎時間、視点を明確にした振り返りを行った。その結果、自らの学習を調整しようとする姿が見られ、「正確に読み取る力」を育む一定の効果が検証された。

〈キーワード〉 正確に読み取る力, 読解方略, 自己調整学習, フィードバックシート

- ※1 「正確に読み取る力」とは、学習指導要領の目標に示されている「必要な情報や概要、要点」を読み取ることができる能力を示す。
- ※2 自己調整学習とは、学習者自身が主体的に学習をコントロールしながら目標を達成する学習スタイルを示す。
- ※3 読解方略とは、読み手の理解を促進する工夫や方法を示す。

I 研究の背景と目的

1 研究の背景

(1) 現状・課題

令和3年度大分県学力定着状況調査による所属校の生徒の実態として、「読むこと」の領域に課題があることが明らかになっており、学年の約半数の生徒が「長文の読み取り」の項目において、目標値を上回っていない状態であった。また、令和3年度大分県立高等学校入学者選抜学力検査(第一次)においても、「時系列に沿った行動の読み取り」「英文の要点に対する読み取り」等、概要や要点を捉える問いの正答率が低い傾向にある。中学校学習指導要領解説の中で、「読むこと」の目標として、「必要な情報を読み取ること」「概要を捉えること」「要点を捉えること」(注1)ができるようになることが示されている。これらのことから、一語一語や一文一文の解釈などの特定の部分だけでなく、全体の大まかな内容を把握する力や複数の情報から最も書き手が伝えたいことを判断する力を育む指導が求められていると思われる。

所属校の授業実践において、まとまった文を読むことに苦手意識をもち、読むことに対して学習意欲が低下している生徒が少なくない。そこで、大分県学力定着状況調査総合質問紙調査の結果を検証したところ、自己調整に関連があると思われる2つの質問において、肯定的な回答をしている生徒の割合が成績上位から下位にかけて低くなっており(資料1)、これらのことは何らかの関連性があるのではないかと推察した。自己調整学習については、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料中学校外国語の中で、主体的な学びにおいて、粘り強く取り組むことと、自らの学習を調整するこ

との2つの側面で評価するといった記述があり(注2)、生徒が自らの学習を調整して学ぶことが重要視されることが分かる。しかし、これまでの所属校での授業実践では、自らの学習を調整しながら読み取る力を育む指導が不十分であったと考えられる。

<資料1> 大分県学力定着状況調査 総合質問紙資料 自己調整に関連があると思われる質問項目

質問項目と回答項目		A層	B層	C層	D層
1年の授業の最後に学習内容のまとめや振り返りをよく行っていたと思いますか	「よく行った」、「ときどき行った」と答えた生徒の割合	90.3	89.5	82.5	73.1
ノートの取り方について、自分なりの工夫をしていますか	「自分流のこだわりがある」、「いちおう工夫はしている」と答えた生徒の割合	73.1	72.4	71.6	64.4

※学年全体の学力調査の結果から成績順に上位25%ずつ4層にわけたもの

(2) 先行研究

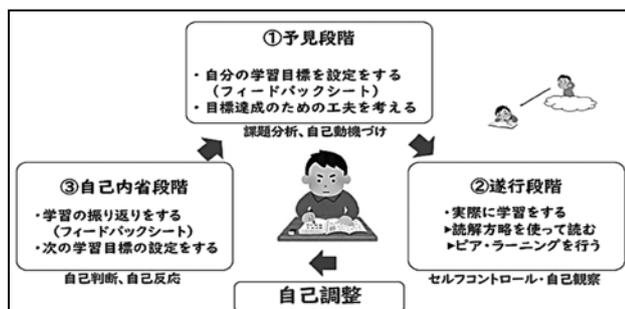
細谷・狩野(2018)は自己調整学習の方法論を取り入れた単元を開発し、「様々な文脈や状況の中で自己調整を機能させながら目標達成していくためには、教授する方略と自己調整学習のサイクルが一体になった方略セットを体系的に指導する必要がある」(注3)と指摘している。この研究では、自己調整学習のサイクルを意識し、明示的に読解方略の指導をすることが、生徒の英語学習に対する自己効力感等の動機づけの向上につながることを示されている。本研究では、この研究成果に基づいて、自己調整学習のサイクルの中で読解方略の指導を実施していくこととする。

西田・久我(2018)は自己調整学習の理論に基づいて、自己調整学習の主要な要素である「メタ認知」「動機づけ」「行動(学習方略)」に着目し、意図的にその要素を促進する英語科学習指導プログラムを開発した。その中で、

見直しをもって学習を進めることを目的とした自己評価シートは、自身の成長や課題の自覚化を促し、次につながる課題や目標の設定につながっており、「メタ認知」を促進する可能性が示されている。本研究でもフィードバックシートを用いて振り返りをさせ、その効果を検証する。また、ピア・ラーニングの活動の中で、学び方の交流を行うことで、学習方略の獲得や動機づけが促進されたことが確認されており、本研究においてもピア・ラーニングの活動を取り入れ、生徒の変容からその効果を検証する(注4)。

自己調整学習研究会(2019)では、「教師は生徒に対して、自己調整学習のサイクルを伝えることによって、生徒の自己調整学習の自己成就の特性の理解を助ける」としており(注5)、本研究を実施していく上で重要な理論となる自己調整学習のサイクルに着目し、それについて(資料2)に示した。

<資料2> 自己調整学習のサイクルについて



また、犬塚(2002)の示している国語科における読解方略を参考にして、外国語科として活用できる読解方略を設定し、(資料3)にまとめた。①～⑥の方略カテゴリーを事前指導において短時間で指導し、検証授業では①～③のカテゴリーを中心に、実態調査で課題があった方略と先行文献で有効とされている方略を用いて指導を行った。

<資料3> 犬塚(2002)による読解カテゴリーを基に使用した方略の内容

読解方略カテゴリー	具体的な方略の内容
①既有知識活用	すでに知っていることと読んでいる内容を結びつけようとしながら読むなど
②意味明確化	難しい文は、自分のことばでかみ砕いて言い直しながら読むなど
③要点把握	大切な所に線を引く、テキスト内容の要点を把握するなど
④構造注目	接続詞に注目しながら読むなど
⑤コントロール	分からないと思ったら何回か読んでみるなど
⑥モニタリング	自分の理解状態のモニタリングを行うなど

2 研究の目的

自己調整学習のサイクルに着目した指導を取り入れ、その効果を検証することを通して、「正確に読み取る力」を育むリーディング指導の在り方について研究すること。

II 仮説

生徒の「正確に読み取る力」を育むために、自己調整学習のサイクルに着目したリーディング指導を行えば、英文の「必要な情報」、「概要」、「要点」を正確に読み取ることができるであろう。

III 研究の方法と内容

本研究では、所属校生徒の「自己調整を図ること」「読むこと」に関する実態を把握し、自己調整学習のサイクルに着目したリーディング指導の効果を検証した。

1 実態調査の実施

実態調査の方法と内容については、以下の表(資料4)に示した。

<資料4> 実態調査の概要

調査項目	①「自己調整を図ること」に関する調査 (選択・記述式)	②「読むこと」に関する調査 (選択・記述式)	③「読み取る力」を測るテスト (選択)
目的	「自己調整学習を図ること」における学習方略の実態把握	「読むこと」における項目ごとの達成度と読解方略の使用状態の把握	「必要な情報」「概要」「要点」における能力の把握
対象	大分市立南大分中学校 3年生 248名		
期日	令和4年 6月30日(木)		

2 事前指導・検証授業の実施

(1) 事前指導・検証授業の概要について

事前指導・検証授業(7学級中、3学級を対象に実施)の目的等については、(資料5)に示した。

<資料5> 事前指導・検証授業の概要

	事前指導	検証授業・事後調査
目的	検証授業で使用する読解方略について事前に指導するため	自己調整のサイクルを意識した授業展開によって「正確に読み取る力」を育むことができるかを明らかにするため ※検証授業後、事後調査を実施
対象	大分市立南大分中学校 3年生 3学級 106名	
期日	令和4年 9月8日(木) ～9月22日(木)まで 15分程度の帯活動を5回実施	令和4年10月7日(金) ～10月26日(水)まで 単元を通して8時間実施

事前指導では、(資料3)の読解方略カテゴリーをもとに、短い英文の中で方略使用について指導を行った。検証授業では4方略(資料6)を中心に使用させ、教科書の短い英文や長文等を読解させた。先行文献で有効とされている図式化して情報を整理する方略においては、単元の中で複数回使用を促しながら方略の活用が可能になるように指導した。

<資料6> 検証授業で使った読解方略シート



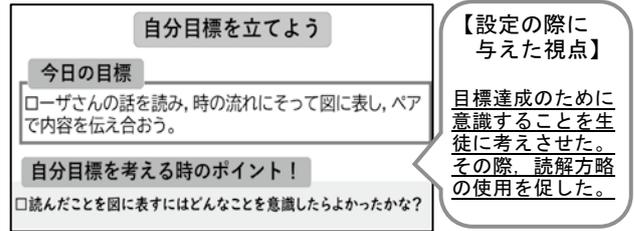
(2) 単元構想について

ディール・H・シャंक(2007)は効果的な読みに関する研究において、「カリキュラムを通して方略の使用を実践することで、学んでいる方略を、いつ、どこで用いるとよいか、方略使用による学習上の利点は何かについて広く知らせることができる」としている(注6)。本研究においても、「正確に読み取る力」を育むことを目的とした単元構想を作成し、毎時間、複数の読解方略を計画的に取り入れた。単元目標については、読み取った内容について、自分の考えを述べることとしており、この単元目標を意識して生徒自身に自らの目標を設定させた。生徒の設定する目標をイメージし、その目標を達成できるように段階的な方略使用を組み込んだ単元構想を行った。また、単元を通して、教師が求める生徒の具体的な姿(見通しをもっている、自己の課題を認識している等)を考え、授業に組み込んだ。

(3) 自己調整学習のサイクルとそれに関連したフィードバックシートについて

単元の最初の時間に、フィードバックシートを配布し、この単元における学習到達度目標(Can-Doリスト)と単元目標を示した。その際に、「読むこと」における目標(自分目標)とその目標を達成するために工夫・意識することを考えさせ、単元の学習に対する見通しをもたせた。また、単元の終末では、その振り返りを行い、できるようになったこととその理由について記述させた。(資料2)で自己調整学習のサイクルを示したが、毎時間の具体的な活動としては、「予見段階」において、目標を提示した後に、その授業の目標に関して生徒自らの目標を記述させ、1時間の見通しをもたせた。その際に、「読むこと」における自分自身の課題、目標達成のための工夫や意識する点などについて考えさせた(資料7)。

<資料7> 自分の目標を設定させる際のスライド



「遂行段階」においては、実際に教科書の本文を読む際に、事前指導で扱った読解方略を使用することを指導し、意図的な方略使用を促した。また、図式化の読解方略においては、事前指導で段階的な指導が必要であると感じたため、いつどのように方略を使用すればよいのかについて複数回指導しながら方略使用の定着を図った。

自己調整学習研究会(2019)では、仲間を介した自己調整学習の有効性について示されており、「遂行段階」において、ピア・ラーニングを取り入れた。その際、目的や視点を明確に示した上で、ペア、グループ活動に取り組ませた。

「自己省察段階」においては振り返りの視点を明確に示し、目的意識をもたせながら振り返りを行わせた。1時間の自分の学び方を振り返り、うまくいったことやいかなかったことの原因を考えさせ、次の学習に生かしていくように指導した。加えて、フィードバックシートには、読解方略の使用について確認する欄を作り、どの方略を使用したのか、またどのように役に立ったかを記述させることで、意図的な方略使用と自分に適した方略の選択を促した(資料8)。

IV 結果と分析

1 実態調査から

(1) 「自己調整を図ること」に関する実態調査①について

「具体的な振り返りができている」「英語の勉強をするとき、方法を工夫する」の調査項目において「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と回答した割合が低く、特に「英語の勉強をするとき、方法を工夫する」の調査項目についての回答は29%と課題がみられる数値となった。「粘り強い取組」に関する調査項目については、数値から課題があるとは断定できないが、粘り強い取組は自らの学習を調整しようとする側面と共に評価することとされているため、検証授業においては、粘り強い取組の変化にも着目した。また、他の項目と比べて比較的数値が高かったピア・ラーニングについても、視点を明確にした活動を行うことで生徒の姿にどのような変容がみられるのかを検証することとした(資料9)。

<資料8> 自己調整学習のサイクルに関連したフィールドバックシート

Unit 3 L5 Feedback sheet

Lesson 5 の Can-Do

①単元はじめ
単元を通しての自分の目標を設定

③単元終末
・変容の自覚
・次の目標の設定

学習到達目標

Lesson5 の単元目標
世界の偉人を紹介する文を読んで、より社会に自分ができることを考えよう。

自己目標
(読むことにおいて、さらにできるようになりたこと)

自分が決めた L5 の目標

自分が決めた L5 の目標は達成できましたか(その理由)

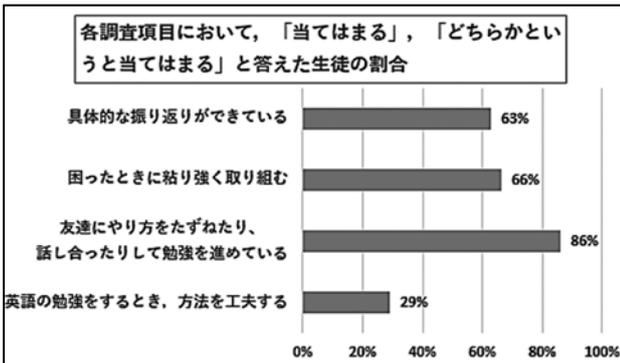
L6 で頑張りたいこと

L5 できるようになったこと(その理由)

②毎時間、記入する内容

- ・本時の目標の確認
- ・自分目標の設定
- ・明確な視点に対する振り返り (方略使用、ピア・ラーニング等)

<資料9> 実態調査①「自己調整を図ること」に関する調査結果 (検証クラス86名)



(2) 「読むこと」に関する実態調査②について

読解方略の使用状況を調査した結果、「簡単な表現への置き換え」「意味のまとまりごとにスラッシュ」「考えを整理するために図を使うこと」の使用頻度が少なかった(資料10)。また、「長文を読むときに、何か工夫していることはありますか」という調査項目に関しては62%の生徒が何らかの工夫を行っているという回答しており、記述回答から、限られた方略の使用にとどまっている可能性があることが分かった。

<資料10> 読解方略に関する使用状況の割合(検証クラス86名)

読解方略カテゴリー(資料3)	読解方略の調査項目	「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」の割合
① 既有知識活用	タイトルから英文の内容を予想	65%
② 意味明確化	難しい文があった時、簡単な表現への置き換え	40%
	意味のまとまりごとにスラッシュを入れること	24%
	代名詞が何を示すのかに注意して読むこと	73%
③ 要点把握	意味が分からない単語はその前後の内容から予想すること	79%
	大切だと思う表現に印をつけること	67%
④ 構造注目	考えを整理するために、図を使うこと	31%
	段落ごとに要点を捉えること	62%
	接続詞に注意して読むこと	66%

検証授業で主に指導した方略

(3) 「読み取る力」を測るテストについて

「読むこと」の目標である、「必要な情報」「概要」「要点」を捉えることができているかを測るためのテストを実施した。その結果、平均正答率において「概要」は18%、「要点」は37%と低い値であった。また、実態調査②の「読むこと」の目標に関する意識調査とテストを比較したところ、「概要」においては生徒の意識と平均正答率に大きな差がみられた(資料11)。

<資料11> 「読むこと」の目標における生徒の意識調査(実態調査②)とテストの平均正答率(実態調査③)の比較 (検証クラス86名)

	必要な情報	概要	要点
生徒の意識	64%	58%	51%
テストの正答率	76%	18%	37%

2 検証授業から

(1) 自己調整学習のサイクルに着目した指導結果

①「予見段階」における生徒の目標の設定について

検証授業後に、自分で目標を設定することについてロイノートを使って振り返りを行った。「自分目標が役に立つと感じた理由について」の記述内容から「目標を意識しながら」「その目標に向かって」等の目的意識や動機づけが高まっていると思われるものが多くみられた。加えて、「自分の成果や成長を得られる」などの自己効力感の高まりを示す表現も含まれていた。

②「遂行段階」における読解方略の指導について

事前指導では、使用方法を短時間で指導する難しさを感じたため、検証授業では主に4方略を中心に指導を行った。図式化する方略については、(資料10)で示した③要点把握の全ての方略を使用して読み取ることになり、効率的に方略指導を行えた。その結果、生徒のワー

<資料14-②> フィールドバックシートにおける記述の変容
(第1時と第4時の振り返りの比較)

C層の生徒

【第1時】

(14) 本時の目標 16の学習者からの期待を踏まえて、MAXに配慮する。 自分目標 自分で書きたことを書いて振り返りをする。

☆振り返りポイント☆

1. 今日学習でうまくいったことやうまくいかなかったことを書いてください。(どちらかで)

今日学習したことをおもしろく考えずに考えたり、文章をいじりたりすることがあった。

【第4時】

回を重ねるごとに具体的な記述が見られるようになった

(14) 本時の目標 読んだ内容を整理して、読んだ内容を整理する。 自分目標 読んだ内容を整理する。

1. 今日学習でうまくいったことやうまくいかなかったことを書いてください。(どちらかで)

前は、この16の長文を全然読まずに、内容を流して読んでいた。でも、スラッシュを入れたり、トヤメの16のノートにメモを取ったりして、読んだ内容を流して読んでいた。今は、スラッシュを入れたり、トヤメの16のノートにメモを取ったりして、読んだ内容を流して読んでいた。

2. 読むトレを使いましたか。はい 読解方略 使った読むトレ(トヤメ) 役に立った点 読んだ内容を整理する。今は、スラッシュを入れたり、トヤメの16のノートにメモを取ったりして、読んだ内容を流して読んでいた。

※学力層とは、検証クラス全員の大分県学力定着状況調査結果から正答率の高い順に上位25%ずつをA層、B層、C層、D層とした。

<資料15> フィードバックシートについてのアンケート結果

「フィードバックシートの振り返りがどのように役に立ったか」()は学力層

【メタ認知が働いていると思われる記述】

- 自分がどこまでできたかを確認するために振り返りをすると、次に繋げることができた。(C)
- 自分が立てた目標に対して何ができていて、何ができていないかを振り返ることで、次の授業の目標も立てやすかったし、今の自分に何がたりていないのかを知れた。(C)
- 自分の反省点やできるようになったことを書き表すことで頭の中でしっかり整理されて、これからしないといけないことや次の課題が見つけやすくなる。(A)

【動機づけの高まりが見られる記述】

- できたことはこれからは繋げることができたし、できなかった所は次のめあてになってどんどんできることが増えていった。(D)
- 次に何を頑張るといかが分かりやすくなり、次にこれをがんばろうという気持ちになった。(C)
- 授業を通してできるようになったことや課題の振り返りをすることで分かったことがあって、次回はもっと他のことを意識しようと思うきっかけになった。(B)
- その日の学習でできるようになったことが目に見えて分かるので、達成感があった(A)

メタ認知

【自己調整を図っているモデルとなる記述】

- 自分がどんな解き方をしているか振り返りを書くために意識するようになったので、間接的に解き方を覚えるコツにつながっている。もちろん振り返りに書いてあることを真することで、前回のことを生かして今回はこれに取り組もうという考え方が広がるという点でも役に立った。

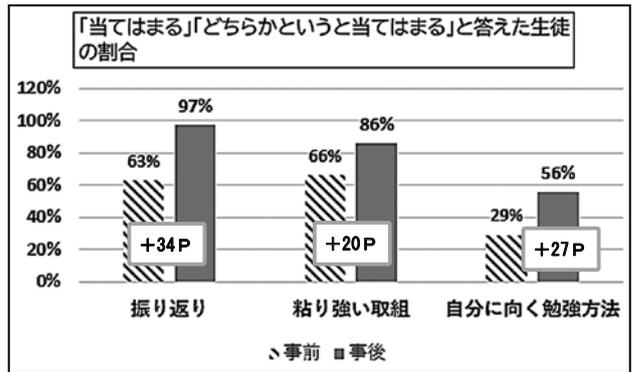
学習方略

動機づけ

(3) 事前調査と事後調査の比較

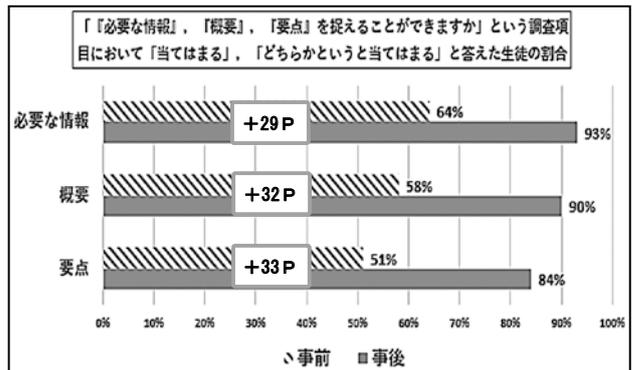
「自己調整を図ること」に関する事前事後の調査を比較した結果、「振り返り」においては34ポイント、「粘り強い取組」においては20ポイント、「自分に向く勉強方法」においては、27ポイントの伸びがあった(資料16)。

<資料16> 「自己調整を図ること」に関する事前事後調査の比較 (検証クラス86名)

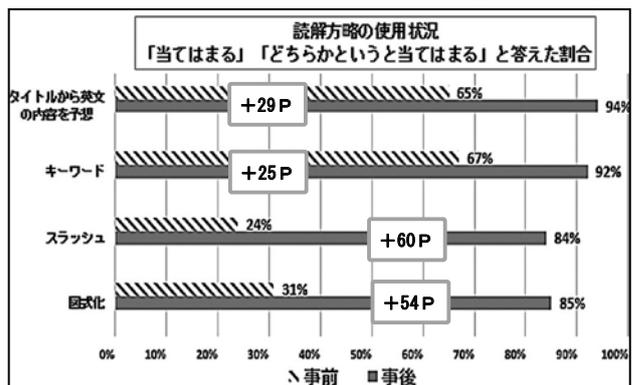


「読むこと」に関する調査では、「必要な情報」「概要」「要点」に関する意識調査で、どの項目も30ポイント前後の伸びがあった(資料17-①)。また、読解方略の使用状況において、検証授業で主に指導した4方略については、どの方略においても、8割以上使用している結果となった(資料17-②)。

<資料17-①> 「読むこと」に関する事前事後調査の比較 (検証クラス86名)



<資料17-②> 「読むこと」に関する事前事後調査の比較 (検証クラス86名)



「読み取る力」を測るテスト結果より、学力層別の平均正答率を比較した結果、B、C層において伸びがみられた(資料18)。

<資料18> 「読み取る力」を測るテストにおける学力層別の平均正答率の比較(%) (検証クラス86名)

層	事前	事後	差
A層	66	74	+8
B層	50	69	+19
C層	30	50	+20
D層	22	36	+13

また、検証クラスと検証外クラスを比較したところ、「必要な情報」については、事前事後の平均正答率に差はみられなかったが、「概要」については、事前調査では検証クラスの方が7ポイント低く、事後調査では検証クラスの方が3ポイント高い結果となった。「要点」については、事前調査では、検証クラスが3ポイント低かったが、事後調査では6ポイント高い結果となった(資料19)。

<資料19> 「読み取る力」を測るテストにおける事前事後調査の平均正答率の比較(%) (検証クラス86名、検証外クラス120名)

	クラス	事前	事後
必要な情報	検証クラス	76	49
	検証外クラス	74	47
概要	検証クラス	18	55
	検証外クラス	25	52
要点	検証クラス	37	63
	検証外クラス	40	57

V 考察

1 自己調整学習のサイクルに関連付けたフィードバックシートの活用について

(1) 「予見段階」において

「予見段階」で、フィードバックシートに本時の目標に沿った自分の目標を記述させ、自らの課題や目標達成のための手立てを考えさせることは、明確なゴールに向かってどのようなことを意識すればよいのかという目的意識が生まれ、その結果、動機づけや自己効力感を高めるのに有効であることが生徒の記述から分かった。

(2) 「自己内省段階」において

シートに、本時の学習でうまくいったこと、うまくいかなかったことの2つの視点で振り返りを記述することは、学習成果を実感し、達成感を得ることや学習過程における課題の原因や理由を自覚することができ、次の学習へと生かされていることが生徒の記述から分かった。また、振り返りの記述をさせる際に、記述することが難しい生徒のために「読むトレが役に立った点」「ペアワー

クで意識したこと」などのより明確な視点を提示することで、具体的な記述をしようとする姿が多くみられた。加えて、教師が生徒のシートを見ながら個別に質問することは、生徒の具体的な思考を喚起するきっかけとなったと考える。

(3) 単元を通して1枚に記述させたことについて

単元を通して1枚のシートに記述することは、ポートフォリオの役割を果たしており、自分の工夫、意識してきたことが可視化されたことで達成感が高まり、次の単元への動機づけとなることが生徒の振り返りの記述から分かった。

2 ピア・ラーニングについて

ピア・ラーニングの取組にあたり、どのような視点で活動をするのかを生徒に明確に示したうえで、毎時間、継続的にペア・グループ活動を実施した。その結果、読んだ内容を精緻化し、相手に分かりやすい表現に置き換えて伝えようとする姿が多くみられ、この過程が概要、要点を捉えることにつながっていることが生徒たちの振り返りから分かった。また、クラスメイトの取組の様子から課題を自覚したり、クラスメイトの読み方を自分の読みに取り入れたり、クラスメイトのモデルが学習の動機づけを促進するきっかけとなっていることが分かった。

3 自己調整学習のサイクルにおける読解方略の指導について

事前指導において、読解方略カテゴリーをもとに、方略使用について指導したが、生徒の思考を促すきっかけとなったものの、短時間での指導は方略を定着させるまでには至らなかった。このことから自己調整学習のサイクルの中で読解方略を早い段階から継続的に使用させることで、より学習成果が得られるものであると考えられる。

検証授業では、毎回の授業において継続的に読解方略の使用を促した結果、個人の目標や課題に応じて自分に合った方略を選んで、積極的に活用する姿がみられた。加えて、読み取りの能力を測る事前事後テストの比較においては、B、C層の生徒の平均正答率が20ポイント近く伸びており、自己調整学習のサイクルの中で読解方略を指導したことが有効に働いていることが分かった。

具体的には、第一に、予見段階では、自分の目標を達成するための手立てとして読解方略を用いている点、第二に、遂行段階で、ピア・ラーニングの活動においてクラスメイトの方略使用をモデルにし、自分に合った方略を選択しながら効果的に活用している点、第三に自己内省段階で、読解方略使用を振り返り、どのように役に立ったか等の効果を実感し、達成感や自己効力感の高ま

りがあるという点があげられる。

また、検証クラスと検証外クラスの比較においても、概要、要点の平均正答率が検証外クラスよりも高く、自己調整学習のサイクルの中で読解方略を明示的に指導することは「正確に読み取る力」を育む手立てとして有効であると判断できる。加えて、「読むこと」に関する調査の事前、事後の比較から、検証クラス生徒の読解方略を使用する割合が増えており、その結果、「読み取る力」を測るテストの平均正答率が伸びていることから、読解方略の指導が有効であったと考えられる。

VI 研究のまとめ

1 成果

本研究では、「正確に読み取る力」を育むために自己調整学習のサイクルに着目したリーディング指導の工夫を行った。

「予見段階」、「遂行段階」、「自己内省段階」のサイクルを促すことによって、「読むこと」において自分自身の明確なゴールが生まれ、何を意識して取り組めばよいかという具体的な手立てを考えられるようになった。明確な目標と手立てがあることにより、「読むこと」に対する動機づけが高まりメタ認知が働いている可能性が考えられる。また、「遂行段階」において明確な視点を提示して、ピア・ラーニングの活動を行ったことで、クラスメイトから効果的な方略使用を学ぶなど、読解方略の獲得と方略使用の動機づけが促されることが分かった。加えて、自己調整学習のサイクルの中で読解方略を使用することで、各段階で読解方略が有効に働き、方略獲得に加えて、生徒の動機づけや自己効力感を高める効果があることが分かった。

また、単元を通して1枚のフィードバックシートに振り返りを記述させたことで、自分自身の設定してきた目標やその振り返りから考察した課題や成果等が可視化され、メタ認知を高める有効な手立てになるということが明らかになった。また、そこで喚起された「読むこと」における学習意欲が次の学習や単元への動機づけにつながるということが分かった。

2 課題

本研究では事前指導で多くの読解方略に係る指導を行ったが、生徒の思考を促すきっかけとならなかったものの、短期間の指導では、定着させるまでには至らなかった。このことから自己調整学習のサイクルを意識した指導を中学1年生の早い段階から継続的に取り入れていくことで、より高い学習成果を得ることができると考えられる。

また、毎時間、自分の目標を設定させ、視点を明確に

した振り返りをさせることは、想定していたよりも時間を要した。そのため、外国語科において、目指す生徒像と自己調整を促す指導の重要性を共有し、指導すべき内容と共に自己調整を促す指導にかける時間について外国語科で共通理解を図っていく必要がある。

事後調査で実施した読み取る力を測るテスト結果から、概要、要点を捉える手立てとして本研究は有効であることが分かったが、必要な情報を読み取ることにおいては正答率に変化がみられなかった。必要な情報を読み取るための指導の工夫として、語彙指導が挙げられる。様々なタイプの文章の中で、文単位で語や句の意味や働きを理解させる指導が求められている。正確に読み取る力を育むためには、読解指導と語彙指導をバランスよく指導していくことが必要であると考えられる。

本研究の検証授業後に、読むことに苦手意識を感じていた生徒たちが、自分に適した読み方を見つけ、自分の力で内容を読み取ることの喜びを感じている姿を見ることができた。英語学習だけに限らず、生徒自らが目標を設定し、自分にとって適切な学習方法を見つけ出し、自分の学び方を手に入れながら自律的学習者として自信をもって自らの道を切り拓いてほしいと願う。

この研修で学んだことを自校や大分市の英語部会で還元し、研鑽を重ねながら英語教育を通して生徒と共に成長していきたい。

＜引用文献・参考文献＞

- (注1) 文部科学省 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編 p20-21 平成30年
- (注2) 文部科学省 国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 外国語 p10 令和2年
- (注3) 細谷智寛・狩野悠也「高等学校英語科における読解方略の使用を促す介入とその効果－自己調整学習教材“Text Detectives”を用いた授業研究－」日本教育工業学会論文誌 vol.42, No1 2018
- (注4) 西田寛子・久我直人「自己調整学習の理論に基づいた『生徒の自律的な学び』を生み出す英語科学習指導プログラムの開発とその効果」日本教育工学会論文誌 vol.42, No2 2018
- (注5) 自己調整学習研究会『自己調整学習：理論と実践の新たな展開へ』北大路図書 p14-20 2019
- (注6) デイル・H・シャンク, バリー・J・ジーマーマン(編著)『自己調整学習の実践』 p55 2007
- (注7) 自己調整学習研究会『自己調整学習：理論と実践の新たな展開へ』北大路図書 p78-83 2019
- ・ Zimmerman, B. J., & Moylan, A. R. (2009). Self-regulation: Where metacognition and motivation intersect. In D. J. Hacker, J. Dunlosky & A.C Graesser (Eds.), Handbook of metacognition in education. New York:Routledge.pp.300-305.
- ・ 犬塚美輪『説明文における読解方略』教育心理学研究 2002